広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第34号　2006.3〉

附属学校における教育実習のあり方を求めて

—国語科の場合—

吉田　裕久　山元　隆春　朝倉　孝之　岡本　惠子
新治　功　末廣　鈴江　土本　勝彦　西原　利典
三根　直美　宮本　浩治

はじめに

本研究の目的と方法

教育実習は，教員志望の学生たちにとって，それまでの学習の総括の場，仕上げの場として，大学生活の中でも，最も充実した，最も多くの収穫が得られる授業科目である。そして，これまでの学ぶ側（児童・生徒・学生）から教える側（教員）への橋渡しとして大事な期間でもある。多くの実習生は，この機会をまたとない学習の機会として，教職技術を磨き，教職意識をさらに高めていく。

この教育実習の実施に当たっては，学部・附属とも，その使命の重さに基づいて，効果を上げるべく，そのつど改良・改善に努めてきている。が，互いに懸命に努力しながらも，それが意図したとおりには実を結んでいないことも事実である。制度的疲労，構造的不備，あるいは現代化への対応の遅れなのか，そうした具体的で，しかも肝心なことが必ずしも明らかになっているとは言えない状況である。そこで本研究は，この教育実習の実際について，とりわけ中・高等学校国語科の実習について，現実にどのように行われているのか，そしてそこにどのような課題が生じているのか，この２点（現状と課題）について明らかにすることを目的としている。そこで，本稿は，附属中・高等学校で教育実習を実施した実習生へのアンケート，そしてそれに対する附属学校教員の分析・考察を中心にした。

教育実習のシステム

中学校及び高等学校教諭免許状取得希望者を対象とする教育実習は，事前指導である「教育実習指導」と，本実習である「中・高等学校教育実習」とで構成されている（事後指導も位置づけられているがここでは触れない）。事前指導である教育実習指導は，教育学部生用と他学部生用が用意されている。「学校教育への理解を深め，教育実習の基礎的能力を養うとともに，教育者を目指す者としての自覚を高めることを目的」（広島大学教育学部ほか『中・高等学校教育実習の手引き』，６ページ）として，観察実習・模擬授業・授業解説など，教育実習に直接つながる授業が開設されている。これは，附属学校教員の支援も得て行われており，これらを経て，実際の教育実習に備えることになる。

むろん，これに先行して本実習が実施される７セメスターまでに，学部ではその基礎となる様々な授業（講義・演習・実習）が開講されている。教育学部国語科の場合，国語科教育，国語学，国文学，漢文学，書道など国語に関する専門科目が開設されている。さらに教育・心理等の科目も教職専門科目として開設されている。これらを受講して規定以上の単位を取得できた学生が，教育実習（本実習）に参加できることになっている。他学部の学生も，教育系の授業は基本的に教育学部で，そして専門科目の授業はそれぞれの学部で受講している。そこでの学習は，教育実習の場で，教材研究に，授業構想に，あるいは学習指導案立案に大きく寄与するものと期待されていよう。

教育実習生及び担当教員へのアンケート調査

さて，こうして制度も人も整備して実施される教育実習でありながら，多くのところで必ずしも満足できるものとはなっていないという声が大きい。特に，学部の授業で行うべきこと，附属の教育実習で行うこと，あるいは学部の授業と附属の教育実習との相関・連続性など，考えてみなければならない課題は多くある。そうした学部授業（事前指導も含めて）のあり方も含めて，教育実習の実施にかかわる具体的な面について，教育実習生，および実習担当教員にアンケート調査を実施し，その実態，分析・考察から始めていきたい。

（吉田裕久）

A Study on Teacher Training for Japanese Language Education at Hiroshima University High School.
Hirohisa Yoshida, Takaharu Yamamoto, Takayuki Asakura, Keiko Okamoto, Isao Sinji, Suzue Suehiro, Katsuhiko Tsuchimoto, Katsunori Nishihara, Naomi Mine and Koji Miyamoto

広島大学附属中高等学校における教育実習の現状と課題

1．目的

年々教育実習に悩む学生が増え，附属学校教員側も指導の難しさを感じている。本研究は3ヵ年の計画でいわゆる「実地実習」といわれる「教育実習指導Ⅰ・Ⅱ」についてその改善を図るために現状を分析し，問題点を明確することを目的とする。

2．観点

①実習生が何に迷ったり，つまづいたりしているか。
②自分ができていることと，できていないことをメタ認知できているか。（何がわかっていないか）
③課題の克服にどう努めたか，その結果はどうであったか。
④実習を通して何を身につけられたか。
⑤問題発生の原因は何か。
⑥指導教員は何を指導し，それはどう機能した（機能しなかった）か。
⑦附属学校として何を改善すべきか。

3．方法

問題点を分析する基となる資料は，教育実習生に対するアンケートと指導教員の気づきを書き留めたもの（指導シート）である。その質問項目は後述する。

4．実習指導の現状

（1）事前指導

実地実習の事前指導は実際に授業が開始される1ヶ月～半月前に1度班毎で集まり，指導担当教員との打ち合わせから始まる。

配属は大学から送られてくる学生個人調査票に学生本人が記載した希望校種，専門研究分野，自己評価，希望分野等々を基にして，本校国語科主任が決める。

現態勢では本校国語科教員は最低1クラスは中学校の授業を担当しており，実習生がどの教員に配属されても中学校・高等学校どちらの校種を希望しても対応できるように保障している。

担当学年・クラス・教材の決め方であるが，既習教材を提示し，実習生の間で調整させ実習生自身に決めさせるやり方を採っている。人生の中で実習は一度限りの機会であり，悔いのない実習を行ってもらいたいこと，また自分で考え自分の意思で選んだ教材を，責任を持って取り組んで欲しいという二つの理由からである。学生が決めかねている場合には，好きなジャンルや大学で専攻している領域とは対極にあるもの（あまり好きでないもの，実習でやらなければ扱わないと思われるもの）を敢えて取り上げるのもいい勉強になるとアドバイスを与えることもあるが，学生の傾向としては，好きな教材を選ぶことの方が多い。

実習生一人当たりの実地授業時数は最低５時間保障するように大学と附属学校の間で申し合わされている。担当教材が決まれば実習初日（あるいはそれより二，三日前）までに各自で5時間分の授業構想，第一時の学習指導案を作成してくるよう指示する。

学生が事前提示した指導案を見ながらその問題点を指摘する。指導の観点は

・教材分析　　・発問計画
・学習者観　　・板書計画
・教材観　　・単元構想，計画
・指導方法　　・学習展開
・評価の方法　　・学習活動の工夫
・目標の立て方　　・指導案の書き方
・教材，資料，学習プリントの作成　　等である。

その後改善を重ね，実地授業を迎えることになる。

（2）実地指導

本校における教育実習は，通常前後期二週間ずつ実施される。

緻密な指導案に基づいて実際に授業を行うわけであるが，経験の少ない実習生に最初から多くを望むわけではない。場数を踏むことが現場実習の最大の目的であると捉え，一時間一時間の実習生の変化・成長を見守るのである。

実地授業における観察観点は，生徒への対応，発問の仕方，板書の書き方，ワークシートなどの使い方，話し方・声の出し方，などである。

（3）事後指導

実地授業を行ったその日のうちに批評会を行う。通常各班ごとで行われるが，時に他班から授業観察や批評会に加わることもある。

批評会の持ち方は指導教員によって異なり，画一的ではないが，概してまず授業者自身の授業説明，振り返り（授業のねらい，自己評価，反省と課題等）があり，その後授業観察者から質疑，意見，感想などの発言がなされ，討議の柱を立てて議論し，最後に指導教員が総括，次時へ向けての課題を明らかにする。

批評会では主に教材研究と授業研究について協議される。他人の授業を批評することは，もし自分がその授業を行うとしたらどうするかという観点に立たせることになり，自分自身の授業を自己評価する力も培うことになる。

また，実習生一人が扱う教材数には限りがある。同じ班の中で異なった学年・分野・領域・教材での授業実習を相互に観察・評価しあうことで少しでも多くの教材・授業と出会わせ，その不足分を補っている。

授業一回分の批評会は約一時間。実習開始直後は質疑や意見もそれほど活発には出されず，指導教員が話す時間の方が長いが，実習後半になると観察者側の批評眼も肥え，教員が口を差し挟む間もなくなるほどに盛り上がることもある。

5．実習生のアンケート結果

（前期13名，後期24名分）

（1）事前準備

a．教育実習の事前指導を受けてから教育実習が開始されるまで，どれくらいの時間をかけて，教材研究や指導案づくりをしたか。

		前期	後期
ア	20時間以上	5 (38%)	9 (39%)
イ	10時間以上～20時間未満	5 (38)	9 (39)
ウ	5時間以上～10時間未満	3 (24)	3 (13)
エ	1時間以上～5時間未満	0	2 (9)
オ	ほとんどしていない	0	0

〈分析・考察〉

先述したように事前指導は実習開始一ヶ月前から半月前に行われる。その間に費やした時間としては多いといえる。

時間だけかければよいというわけではないが，実習に対する意欲はうかがうことができる。教員にはならないがとりあえず単位・免許だけ取れればよいという姿勢の者も過去に若干見られたが，そういう姿勢で実習を受けてもらっては生徒にとっても迷惑である。

b．教材を通して，どんなことをしたいと考えていたか。

・主題について生徒の実体験を交えて考えさせたい。
・自分の意見を皆に説得力を持って伝える練習をする。
・現代に通じる兼好の感性を子供たちに伝えたい。
・心情の変化をとらえさせる。
・セリフのない漫画から物語を作り朗読することで，想像力を豊かにすること。
・生徒の実生活とは直接リンクしない本の中の筆者の気持ちを少しでもリアルに伝えたい。
・古典を学ぶことの意義を自分自身考えたかった。・子供たちが古典に興味を持ち，親しみ，自ら学ぶ姿勢を作りたかった。
・漢文を学ぶことから，日本文化に与えた影響を感じ取ることができるような授業をしたい。
・作者の主張を読み取り，それに対する自分の考えを持ってほしい。
・自分自身と照らし合わせて思いを巡らせ，それを書く活動につなげていきたい。
・古典に親しみ簡潔な表現の中に含まれている深い意味を感じられる，現代の言葉に通じることを知り興味・関心を持てる。
・行動して自分の人生を切り開いていく大事さ。
・繰り返し使用される文法，語彙を確実に押さえ，文章の余情を感じて古典に親しみを持ってほしい。
・読解後，授業で読み取った人物像を生かして物語の続きを作文にする。
・古典を訳，文法という学習にとどめるのでなく，登場人物の生き様を通して，その生き様に共感し，自分の生き方について考えさせたい。
・書くことに対する抵抗感を少しでもなくし，書く力の伸長を図ること。
・（古文・和歌の）歌われる心情や情景を読み解く。
・感想を書き，表現力をつける。

〈分析・考察〉

あるべき授業像が不明確である。何がやりたいのか，教材に即して具体的な目標を立てることができていない。また，やりたいことはあってもそのことの必然性やねらいが曖昧である。

その教材で何を教えるのか，学習者にどのような力をつけたいのかが明確であれば，そこから自ずと「発問計画」そして「板書計画」が見えてきて，指導の方向性も立てやすく，具体的な示唆を与えることもできる。

しかし，その前提となる授業のねらいの立て方が理解できておらず，実習に入ってそこから悩み，戸惑う実習生が多い。

c．教材研究は，具体的にどのようなことをしたか。

主に以下の4つに分類された。

・教材本文を読み込む。
・鑑賞文や作品論を読む。
・過去の授業実践や教材研究論文を調べる。
・関連文献にあたる。

上記の1つだけの実習生もあれば，複数の方法を行っている者もある。しかしこれらは方法論であり量さえこなせばよいというものではない。

学生の回答の中には次のようなものが見られた。

・まずは本文の読解を自分自身で行った，次に訳や語釈がのった研究書も参考にして，教科書に取り上げられた文章の読解を進めた。その後，

単元全体を研究するため，先行研究書（作者，作品について）を数冊読んだ。教材研究をしていく上で，教材観が自然にまとまってきたと思う。
・意味や文法などの解釈をしました。原文にも目を通し，教科書に載っている部分だけで，授業を組み立てることに決めました。現代にも通じるテーマ，学習者が身近なものとして考えられるテーマを導き出して本教材を通して学習者にどのような力をつけさせたいかを考えて目標を設定していきました。
・教材を通して生徒に何を考えさせたいか，何を身に付けさせたいか。そのためにはどういう活動をさせるべきか。
・本文を読み，自分の読みを作り，その中から生徒に教えることを考え，どのようにすればそれが伝わるかを研究。

上記の回答を示した学生は少数派であるが，まさに私たちが目指し，求める内容である。作品自体の価値や作者の背景を講義するだけが授業ではない。そこに「学習（学び）」がなくてならない。教材研究とは作品研究に加え「指導研究」が必要不可欠である。

もちろん作品研究は教材研究の前提となるものであるから不必要というわけではない。多分大学では教材研究の入り口として作品研究のやり方を教授しているのであろう。だがその作品研究すらが授業に生かされているとは思えないのが現状である。

昔と違って，今はインターネット等を含めて，指導書がなくてもそれにかわるようなものが手に入り易くなっている。学生は自分で深く考えたり調べるより，手近にあるものを安易に参考にしようとする傾向があるのではないかと感じる。

d．教材研究は，十分だったと思うか。そう思う理由も書け。

	前期	後期
ア　十分だった	0 (0%)	1 (4%)
イ　まあまあできた	3 (23)	5 (22)
ウ　少し不十分だった	6 (46)	11 (48)
エ　かなり不十分だった	3 (23)	6 (26)
オ　よくわからない	1 (8)	0

このアンケートは実習終了後に実施されたものである。実習前に比べれば教材研究の何が不十分であったかを自己分析できるようになっていると思われる。

しかしそう思う理由を見てみると，それでもなお「作品研究」に留まっているものもある。

・授業を進めていくうちに自分の読みがぐらついてきたので，事前にいろいろな人と話し合っておくべきだった。
・文法事項の確認が不十分だった。
・先行研究，補助資料集めに終始して自分の読みを確立していなかった。
・作品の表面上の分析しかできておらず，深く読めていなかった。そのため，生徒にその良さを伝えきれなかった。

指導教員側は下記のような分析に到達できるよう，教材研究とは何たるかを教えなければならない。

・生徒の成長のために教材研究するべきで，目の付け所が違っていた。
・解釈本については四冊を十分に検討したので，偏った読みになることは無かったと思う。ただその教材のどこを発問の材料とするかなど，授業と結びつけた教材研究が足りなかった。
・教材で教えるということがよく理解できていなかったから。

〈分析・考察〉

教材研究の方法やその深さについて大学で学んではいると思われるが，実地授業に向けて個々具体的な教材を選び，その教材をじっくり研究するという経験は実習が初めてではないだろうか。

経験の少ない実習生に多くを望むのは酷な話であり，指導教員も実際に実習生が作ってきた指導案を見てその学生の力量を判断し，個々に応じて具体的な教材研究の進め方を指導しているのが現状である。

できれば大学での演習等を通じて，生徒の思考を触発し，彼らの認識および国語学力を深め高めようとする授業構想，授業のあるべき姿へ繋がる教材研究・指導案作りをもっと経験してもらいたい。

（2）実地実習

e．授業観察から得たこと

〈分析・考察〉

批評会を班単位で行うため，同じ班員の授業観察を義務付けている。また時間的に調整がつけば，他の班の授業を観察したり，批評会に出席することも奨励している。

実地授業を行うまでにも，大学4年生になるまで研究授業や公開授業を観察する機会はあったであろう。しかしそれは観点もあいまいで，漫然としたものではなかっただろうか。実際に自分が授業を行う立場になって能動的に観察するという姿勢は，実地実習期間

に身につくものと思われる。アンケートの感想を見ても，他の授業者を自分に置き換えて観察したり，良い所を学ぼうとする態度が表れている。

- 自分と課題が同じ教生の授業を見ると観察しながら「私ならこうする」と考えることができた。
- 観察をしていて，その授業者のいいところ，工夫をしているところを積極的に自分の授業に取り入れた。
- 自分の授業で不十分なところ，改善すべき所などが見えたと思います。

また授業者観察だけでなく，学習者の反応を観察する視点を持つようになる。

- 同じ学年でもクラスによって雰囲気が全く違うので，やはり日々の生徒との関わりを大切にし授業に生かしていきたいと思った。
- 生徒は，授業者の怠慢に敏感である。つまり授業者が生徒の「考える力」を刺激しないような状態が続くと授業に見切りをつけるようになる。
- 発問の仕方で生徒の反応が大きく変わることがわかった。授業の展開の仕方，間や山場をつくることなど，やはり学年またクラスごとに反応が様々で，また先生の言葉遣いも自然と（そのように見えた）その学年に合わせられていてすごいなあと感じた。

自分が授業だけをしていたのでは学習者の反応までなかなか冷静に客観的に見ることはできない。観察者として学習者の反応を見ることで自分の授業に活かせることも多いと思われる。

f．実地授業の時間数（５時間）について

	前期	後期
ア 十分だった。	7 (54%)	15 (68%)
イ もう少し多い方がよかった。	4 (31)	5 (23)
ウ もう少し少ない方よかった。	0	0
エ よくわからない。	2 (15)	2 (9)

もう少し多い方がよかったと感じた理由

- 5時間でまとめきれてはいなかったので，本当はもう1時間あった方がよかったかもしれない。気力が限界でした。
- 多い方が力になると思うが，他人の観察ができなくなることと，体力が保つかどうか心配。
- 時間で授業になれるという感じなので，自分を出していけるのはそれ以降の授業だと思った。
- 授業力が少しずつ上がってきた頃に5時間たっていたから。
- 何回やっても完璧と納得することはなかったと思います。
- やっと方向性が見えてきたときに終わらなければならなかったから。しかし体力的には2週間で5時間が限界だと思った。
- 単に今回の自分の授業がやりきれなかったというところが大きい。しかし，指導教官の先生方が大変だと思うので無理とは思いますが。
- 納得いくまで授業をしたかった。もっと生徒達のことを知りたかった。

〈分析・考察〉

1人あたり実地授業を最低5時間保障するというのはここ最近，大学と附属学校の申し合わせによるものである。しかしそれ以前も4～5時間を割り当てていた。

国語科の場合，教材の長さ等の理由で1単元1時間という切り方は難しい。自ずと1単元を4～5時間かけて授業することになる。時間割によっては3日続けて授業があることもあり，授業－批評会－指導案見直し－授業－批評会‥‥と連続することになる。ましてや前の授業が6時間目にあって，次の授業が翌日1時間目にある場合など，批評会後に指導案の手直しをするのが時間との勝負になる。もちろん先を見通して，あらかじめ3時間分の指導案を作成するように指導はするが，指導案どおりにいかないのもまた授業の妙味であり，感想の中に「体力」の文字が目に付くのもそういったことが要因であろう。

往々にして5時間実習し終わったころようやく授業の何たるかが見え始めるのであるが，時間的・物理的にそれ以上実地授業時間を確保することは難しい。

さらに平成15年度から教科指導だけでなく，一つのクラスに配属され担任教員の指導の下でクラス経営を観察・実施するホームルーム実習が導入された。実習期間は変わらないのでそれまで以上に授業準備に費やす時間が削られることになる。

g．指導教官から，どんなことを学びましたか。

大別すれば以下の3つに分類できる。

◆授業構想

- 指導案作りのポイントから，授業をするポイントまで。
- 細案の大切さ。幅広い知識を持ち合わせておくことの重要性。
- 教材研究と作品分析の違い。
- 発問の難しさと教材研究の関係。
- 「教材を教える」のではなく「教材で教える」のだ

という姿勢。
・授業はそのとき，その瞬間の反応を大切にするべきだと思うが，授業準備では常に予測した上での予習が必要だということ。

◆指導技術

・「中心の発問」と「それに向かっていく発問」がわかる授業作り。
・生徒の興味をひくアプローチの仕方。
・立ち位置など先生の言動。
・板書，色チョークの使い方。
・音読の重要性，グループ学習の意義，発問の仕方。
・生徒から声を出させるにはどうしたらよいか。

◆授業観

・教え方，作品の読み取り方，生徒とのコミュニケーションの方法，教育に対する考え方。
・教師とは「教える」だけでなく生徒の意見・思いを「語らせる」人間だということ。
・「生徒を受け入れている」という姿勢が伝わることで活発に意見を言える空間を作れる。
・生徒の意見を大事にすること，生徒と生徒のつながり，人の意見を受け入れることのできる雰囲気の必要性。
・何を生徒に学ばせたいか。生徒にどんな力をつけさせたいか，そのためにどういう授業をすべきか，など，生徒が主役となる授業作りについてなど。
・生徒の実態に即した授業をする必要があるということ。
・教材から，今を結びつけ，人生を語る。

（3）事後指導

h．批評会の内容は，

	前期	後期
ア 充実していたと思う。	9 (69%)	16 (73%)
イ まあまあ適切だった。	4 (31)	6 (27)
ウ もう少し少ない方がよかった。	0	0
エ よくわからない。	0 (15)	0

・批評会の回を重ねるごとにだんだんと要領を得，観察する際も目的を持つことができたから。
・班員それぞれが意見し合い，授業者以外の班員も自分の授業で生かせる内容だった。
・先生や班員が授業に対してどういう思いを持っているのかが分かった。もっとほかの観察者の違う視点から見た感想も聞きたい。
・厳しかったが，次どうすればいいかがはっきり分かる批評会だったと思います。ただ，最後の合同批評会はあまり意味を感じませんでした。
・全員に必ず発言の機会があり，そんな些細なことでもよくしていこうという意識が見られてよかった。
・その回ごとに話し合うテーマを設定することで，より深く目的意識のある話し合いができた。
・指導教官の先生はとても上手でした。というのは改善点はしっかり指導してくださり，良かった所はしっかりと誉めてくださいました。ですから落ち込むことなく，次の授業へといつも前向きになれました。
・授業を観察するだけより，何倍もの勉強になった。

〈分析・考察〉

アンケートの結果だけを見れば，同じ班の他の実習生に触発・啓発されたり，指導教員に適切な助言を与えられたり等，学生サイドから見れば批評会自体は充実したものであったようである。

一方教員サイドから言えば，今ひとつ批評会が深まり，広がりに欠けるように感じている。

・もう少し教生同士で活発な意見のやりとりをすればよかったと思う。
・教材研究で足りなかった，読みを深めたかった部分が明確になった点で充実していましたが，もう少し技術の点についても批評がほしかったです。教材の中身についてがほとんどだった気がします。
・少し遠慮した雰囲気があったように思う。もう少し自分自身も班員の授業に対して意見，質問を出せる事ができたらよかった。

教育実習中同じ班員の授業はすべて観察し，当然批評会にもすべて参加する。近年実習生の数が減り，一班2人ということも珍しくない。となると1人は授業者であるから観察者・批評者が残りの１人ということになる。1班４～５人いれば，司会・記録など役割を分担して，実習生だけで批評会を運営させることもできる。あるいはそういった授業批評会・研究協議会を自分たちで運営できる力をつけることが望ましいのである。

上記の理由からもできるだけ他の班の批評会に参加・発言し，批評会自体が盛り上がるように促す。しかし他の班の授業を観察できても，時間帯が重なるなどの理由で批評会に参加できないことの方が多い。

本校の課題として複数班で合同批評会を行うなど，観察した授業の批評会に参加できるよう保障すること

が挙げられる。

批評会が盛り上がらないもう一つの原因には，学生同士の遠慮がある。昨今の若者気質なのか，意見をすることは相手を傷つけることと錯覚している感があり，褒めることは言っても，痛烈な評価言は発せられない。行き過ぎは禁物ではあるが，互いの授業力を高めることが目的であれば，厳しさも不可欠である。

大学の演習等において批評のあり方を学ぶ機会を求めたい。

ｉ．教育実習中，あなたが苦労したり，困難に感じたことは何か。（複数回答）

		前期	後期
ア	指導案の書き方	6 (46%)	10 (42%)
イ	教材研究	7 (85)	13 (54)
ウ	生徒への対応	7 (85)	13 (54)
エ	発問の立て方	13 (100)	20 (83)
オ	板書	9 (69)	10 (42)
カ	ワークシートなどの作り方	3 (23)	2 (8)
キ	目標の立て方	4 (31)	4 (17)
ク	１時間の授業構想	4 (31)	13 (54)
ケ	健康の維持（睡眠も含めて）	2 (15)	5 (21)
コ	授業での話し方，声の出し方	4 (31)	8 (33)
サ	指導教官との関係	1 (8)	0
シ	実習生同士の関係	0	1 (4)
ス	通勤方法	0	3 (13)
セ	金銭面	5 (38)	8 (33)
ソ	その他	1 (8)	0

〈分析・考察〉

ア～キを見ると，困難を感じている実習生の割合が前期より減少している。前期実習を経験したことによって，これらの力がついたという仮説が成り立つ。一方で，クについては困難を感じる実習生の割合が多くなっているのは，あるべき授業像が明確になり，到達目標がより高くなったことに起因するのではないかと考えられる。どちらにしても成長と捉えることができるのではないか。

わずか2週間あるいは4週間という短期間ですべてのことを身に付けるのは到底不可能であり，授業の難しさを実感するところに教育実習の意義がある中で，多くの実習生が「教材研究」「発問の立て方」「板書」などに難しさを感じ，問題意識を持てるようになったことは，彼らにとっての収穫であるといえよう。

ｊ．教育実習に来る前に，大学でもっと学んでおけば良かったと思うことは。

- 教材の読み取り方。作品に対する知識。
- 指導案の作り方。
- なぜ教えるのか。どう教えるのかは，授業を通して学んでいけばよいが，なぜ教えるのかは前提としてもっと理解しておくべきだった。
- 教授の仕方についてもっと国語科の授業で学んでおくべきだった。
- 発問について考えるなど実践的なこと。
- 指導の技術（板書の練習，発声の方法など。）
- 作文を書いたりグループを活動させる授業の方法論。
- 文章を常に教育目的のものとして見ればよかった。
- 大学で教わっていた事だったが，その重要性を改めて実感した。
- 生徒とのコミュニケーションをスムーズに行うために気をつけることなど。
- 実践的な指導，つまり指導案をただ書かせるだけでなく，添削されてるとよいなあと思う。
- 教材研究をどうすればいいかということ。理論だけでなく，もっと現場で役に立つような授業の方法。（模擬授業などをさせてほしい）

〈分析・考察〉

圧倒的に方法論が多く挙がっている。おそらく大学でも学んでいる（あるいは学ぶ機会を保障されている）ことだろうと推測されるが，学んだ理論が実践を通して自覚されるというのは誰しもあることである。

できれば大学教育の早い時期に（例えば3年生の後期）批評会まで含めた形の実践機会を与え，さらに理論を充実させ課題意識を持って4年次での実地実習に臨ませたい。

６．教員の指導シートの分析

指導教員の実習生に対する評価，見解，感想

①授業で何をしたいのか，その目標など
②教材分析
③教材・資料・学習プリント等の作成
④授業構成
⑤話し方・生徒との対応・ふるまいなど指導力
⑥実習に臨む態度・姿勢

平成１７年度前期では上記各項目について自由記述とした。後期実習では各項目ごとに記載する際の観点を以下のようにさらに細かく分けて記述した。

・問題だと感じられた点

・そのことに対する指導内容
・その結果どう改善されたか（改善されなかったか）
（改善されなかった場合はできるだけ理由も書く）

改善された部分をピックアップしていくと，必ずしも指導教員の指導のみによって改善されているのではないことに気づく。

・自分の読みをおしつけていたが，批評会での指摘によって改善されていった。
・生徒が楽しそうに作業することと授業の活性化を勘違いしていたが，指摘や生徒作品によって，その誤解に納得した。

また，授業計画段階での問題点については，助言によって改善していくことが十分にできていると言える。それだけの柔軟性を実習生は備えているのだろう。

・先行の実践例に頼りがちだったことは，その実践例の問題点に気づかせることで改善されていった。
・筆者の主張を見極めることができていなかったが，示唆によって改善された。
・当初設定していた目標や活動に無理があったため，変更していかざるを得なかった。
・訓古注釈的な授業を展開しようとしていたが，自分の目標に即した展開にするよう助言することによって，作品の構造・内容に観点をおいた展開に改善されていった。

授業展開の中で問題となる部分，あるいは，実地授業の中で明らかになった自身の課題についても，かなりの程度改善されている。

・生徒に意見を詳しく説明させることができなかった部分は「生徒の意見の氷山の水中の部分を表に出させることが必要」というアドバイスによって改善された。
・プリントが授業で生かされていなかったことは授業の組み立て方を指導することによって改善された。
・指導教員の指導を待っている姿勢は，自分で考える余地を残したアドバイスをすることによって改善された。
・一方的に話していたのが，待つことの必要性を指導することによって改善されていった。
・写真などの資料の見せ方が効果的でなかったが，授業の流れに沿ったものにするよう指導することによって改善されていった。

一方で，改善されなかった部分をピックアップしていくと，その原因は個人の力量に帰すると考えられるものが見受けられた。

・作業時，全体を見渡すことが不十分だったことは指摘し指導したが，改善されなかった。
・教材の内容を教えるというイメージしか持っていないことを実地授業をするたびに説明したが，気づいた後もその枠を越えられなかった。
・作品分析が不正確だったところを指導したが，自分の読みにとらわれていた。
・作成したプリントがかなり雑で多くの不備があり，直前まで手直しをさせたが，指導教員がすべて指示したものになった。

また，次の気づきは，内容が高度なために，改善が難しかったと考えられる。

・生徒の意見を整理して全体でどのような読みを行ったかを確かめることが改善できなかった。ひとえに教材研究不足。

しかし，ほとんどの教員が指摘している「板書」と「発問」については実習生個々の問題ととらえるのではなく，今後の課題としていかなければならないのではないだろうか。

・板書については，示唆・明示したが，うまくつくれない。
・板書計画が作れず，指導によって見通しを立てさせたが，作り方を身につけることができなかった。
・構造をつかむことが少し苦手なようだったので，図式化して示したが，最後まで課題であった。
・発問の順序がうまく組織できていなかったので，発問と板書を対応させて組み立てるよう指導したが，改善されなかった。

板書については，改善されていったというコメントは見受けられない。思考の枠組みをとらえる「読み」をしていくことを大学での演習等積み重ねていくことが不可欠である。

7．今後の課題

総じてどの実習生も真面目であり，意欲的である。

しかし，自分から考えようと努力する姿勢は見られるものの，時間ばかりかかり自分では前に進めず，結局指導教員の助言で授業を構成し，自分の発想が授業に反映されない実習生が見受けられるようになっていることを複数の教員が感じている。

近年の傾向として何をどうすればよいのかわから

ず，指導教員の指示を待つ「受け身」の姿勢が目立つ。何がそうさせているのであろうか。

一つには実習に対する課題意識の低さであろう。

大学で理論を学ぶ。しかしわかったつもりになっているだけで，本当に自分ができていることと，できていないことをメタ認知できているわけではない。当然実地授業に対する課題も明確にできない。実践してみてはじめて理論の意味するもの，価値が理解される。特にこの度の調査によって「教材研究」や「発問」「板書」などは具体的に実践しないと何ができないのかが実感できないことが明らかになった。

平成16年度から前後期別々の附属学校で合わせて4週間実習を行うカリキュラム（教育実習Ⅰ）が導入された。前期に本校で実習し，後期他附属で実習する学生もあり，その逆もある。

今回，実習生のアンケートの中に「2週間の教育実習の間に出来るようになったことは何か。出来なかったことは何か。」という項目を挙げた。

平成17年度「前期」実習生の主な回答を挙げる。

◆出来るようになったこと
○思考を深める発問を授業に取り入れること。
○前半は準備してきたことを話すので精一杯だったが，後半からは生徒を見回し反応を確かめる余裕が少し生まれたと思う。
○板書が少しわかりやすくなったこと。
○授業を少しは客観的に見られるようになったこと。
○とにかく教材分析の重要性がわかったので，うまくできるかどうか別としてそれに相当な時間を費やしても平気と思えるところだと思う。

◆出来なかったこと。
○導入がうまくできなかった。「今日は○○を考えます」みたいに突然始まる授業だった。
○特に最初の授業，２時間目の授業で思考の発問を取り入れられなかった。
○もっと生徒とコミュニケーションをとりながら授業を進めたかった。
○目標を明確にした授業をすることが難しかった。また前半のうちは特にわかりやすい板書を作ることができなかったのがくやしい。発問も，自分の中でまだ不十分な面があると思う。生徒の答えを強引に引き出すのではなく，自然な形で発問を進めたい。
○発問の仕方。生徒の反応を予想することを含めて。山場の作り方。
○生徒に考えを促したり理解を深めるような発問の仕方。
○もっとしっかり教材研究が必要だった。
○教材研究（教材観）を授業，ワークシートに生かすこと。

「前期」実習における個々の成果と課題が，後期実習でどこまで活かせたのであろうか。この制度が導入された過去2年間は前期実習での個々の課題を意識させる段階まで行き着けなかった。

そこで以上のような反省や今回の調査結果から次のような「前期振り返りシート（自己評価票）」を試案した。

●前期の実習を振り返り，以下の項目について「×＝改善が必要」「○＝大体良い」「◎＝大変良い」の3段階で評価し，改善点があれば具体的に簡潔に記述してください 。

	項　目	評価	具体的に課題とすべき点		項　目	評価	具体的に課題とすべき点
授業前準備	授業構想			実際の授業	生徒への対応		
	教材研究				発　問		
	発問計画				態　度		
	板書計画				板　書		
	ワークシート				全体の流れ		

このシートは前期実習が終了した時点で記入させることで，後期実習での課題意識，目的意識を明確にさせることがねらいである。前期での実践で学んだ理論を深め，さらにできなかったことの反省や，新たな課題を明らかにして後期実習に臨ませたい。

次年度は「振り返りシート」を実際に活用し，前期の実習における成果や課題が，後期の実習に機能させることができるか否か，研究を進めていきたい。

また本校だけでなく他附属学校間で相互にデータを活用するなど，より連携を密にして教育実習Ⅰが実り

多いものにしていきたい。

今回はじめて，教育実習生に対するアンケート調査を実施し，その分析・検討をもとにして，附属中・高等学校での教育実習の現状と課題を明らかにした。本稿を閉じるにあたって，ここでは主として大学での国語教育学関係科目の内容と附属学校での教育実習の実際との関連を中心に考察を展開したい。

おわりに

国語文化系コースにおける国語教育学関係科目には次のようなものがある。

・国語教育基礎論（２セメ）
・国語科学習開発論（３セメ）
・国語教育学概論Ⅰ（３セメ）
・国語教育学概論Ⅱ（４セメ）
・国語教材研究演習（５セメ）
・国語教育方法論（６セメ）
・国語科教材・カリキュラム構成論（５セメ）
・国語教育史（７セメ）
・国語教育評価論（８セメ）

「国語教育基礎論」は国語科教育に関する基礎的な問題を取り上げ，国語科教育について問題意識を喚起することを目指した科目であり，そこで扱った問題をより実践的なかたちで展開しているのが「国語科学習開発論」である。３セメ・４セメで展開される「国語教育学概論Ⅰ」「国語教育学概論Ⅱ」は国語科教員の免許取得のための必修科目であり，「Ⅰ」において国語教育学に関する全般的な話題を扱い，「Ⅱ」においては国語科の各領域の授業づくりのための基礎的問題を扱っている。５セメ以降の各科目では，国語教育学の各領域ごとの課題をより詳しく扱っている。「国語教材研究演習」では主として中・高等学校国語教科書教材のなかから読むことの教材を取り上げ，「教材研究」のあり方を演習形式で学習している。それをふまえて「国語教育方法論」では読むことの指導方法を学び，授業づくりの基礎に関して演習を通して学習している。「国語教材・カリキュラム構成論」では，国語科の単元づくり・カリキュラム構成についての具体的な検討を通じて，系統性をもった国語学習を築いていくための知見を獲得している。さらに「国語教育史」においてはわが国近代・現代における国語教育の史的遺産を検討し，「国語教育評価論」においては国語科の評価に関する諸問題を扱っている。

このようなかたちで国語教育学関係科目は，国語文化系コースにおけるカリキュラムにおいて展開されており，国語科教員としてわきまえておく必要のある知識・情報を可能な限り学生に提供し，また国語科の授業者となることを想定した演習も盛り込んでいる。

しかし，前述の教育実習生のアンケート結果の分析から見る限り，大学において展開している講義・演習の内容が，「教育実習生」としての学生の力量として確実に蓄積されているかと言えば，必ずしもそうなっていないということが見えてくる。とりわけ，教育実習における「教材研究」及び「授業づくり」の実際に直面したとき，大学で履修したはずの内容が十分に生かされていない。この点をふまえ，大学教員として考慮していかなければならない課題として現時点で次のようなことを指摘することはゆるされるのではないか。

（１）国語科における「教材研究」の実際に取り組む機会と時間を従来以上に確保する。
（２）「発問」「板書」等，授業を展開する上で必要な指導技術について，体験的に学ぶ機会を増やす。
（３）国語科授業を構想する力を育てるための学生への働きかけを工夫する。
（４）「教材研究」を進めるなかで，授業づくりの核となる要素を発見する力を育てる工夫をする。

もちろん，授業者としての経験のない学生に大学の講義・演習だけで上述のことをリアルに理解させることには常に困難がつきまとう。しかし，講義・演習の内容に上述の課題を克服する企てをしていく必要があると考える。

さらに，ここでは十分に触れることができなかったが，国語教育学関係科目の履修に加え，国語科内容学関係科目の履修において，「教材研究」の力量形成を深めていく機会が少なからずあることは確かである。大学における学習のなかで，「教材」を深く分析する機会をできるだけ設けるためには，現在のカリキュラム上に設定されている講義・演習科目のなかでそれを実現していく可能性をさらに探っていく必要がある。

（山元隆春）